

# 労協連だより

古村伸宏（日本労協連・事務局長）

紅葉が北の地から深まる中、常夏の沖縄で、いよいよ空前のケアワーカー集会が幕をあげようとしている。準備に携わって8ヶ月。改めて日本の社会が大きな転機を迎えていることを強く感じた。それは、ケアワーカーの生々しい切実な声とともに、意外とも思える自治体の人々の苦悩に満ちた現状を少なからず目の当たりにしたからだ。こうした事実が積みあがって、1000人を越える人々が、沖縄・名護の地に集う。沖縄以外の参加500人という規模も驚嘆の数だが、それ以上に、沖縄からの参加500人という規模は、1県単位では過去の労協連の集まりでも最多であることは間違いない。東京・首都圏や大都市圏でも実現しえなかった規模と内容を伴い、労協運動の新しい境地を拓く集会へ、最後の緊張を持続して臨みたい。

来春の総会は東北・仙台の地での開催となる。これに向け、空白県克服を軸に、労協運動の新しい峰を目指し、行動が続いている。来秋の全国協同集会も長野の地に決まり、準備が開始された。いずれも自治体への働きかけと、新しい関係づくりが軸となって取り組まれていく。「働く場の創出」「仕事おこし」のノウハウは、着実に蓄積され、成果を発揮している。しかし、正念場はこれ以降だ。コミュニティビジネスの担い手とされる我々が、新しい「産業の創出」「地域経済の再生」を実現しえた時、法制化の期待とともに、この運動が花開く時がくるだろう。

鈴木真理子岩手県立大助教授に、子育て支援事業推進会議の講演依頼でお話をする機会を得た。以前から、岩手高齢協の子育て支援やヘルパー講座ではお世話になってきたが、子育て支援分野でのワーカーズコープの仕事おこしについて、何度かお話を

させていただき、大きな期待を寄せて下さっている。先生は、厚生労働省の「社会保障審議会福祉部会」で地域福祉計画の議論に参加されたり、今社会的なテーマである「次世代育成支援施策のあり方に関する研究会」の委員にもなられている。子育て支援では、日本有数の研究者の方だが、「人間らしく働くこと」への底深い共感を頂いていると自負している。それは、人が育つ・子供が育つ、という事と通ずる、今の社会の病巣への問題意識からくる共感だと確信している。

また、3月のケアワーカー集会で念願の講演を頂いた広井良典千葉大教授とも、近々に雑誌の企画で対談の運びとなった。内容は、「看護学雑誌」(医学書院)での対談シリーズの一コマで、テーマは「ケアとコミュニティ」「ワーカーズコープ」「第3の経済」そして「若者の自立と仕事おこし」と多岐にわたる提起を頂いている。広井先生にも、「協同労働」が生み出す「人間力の回復」や「コミュニティの再生」への底深い期待を感じる。そして、公共・行政・大学・制度などどう関わっていくか、どう変化しあっていくのかという問題意識を強く感じる次第である。

ともあれ、両先生とも、私などが対等に話をしていただくなど夢のような方達だ。本や活字の世界の人たちだった。その人たちとこうして、思いを通わせる話ができること、そこに自分の言葉を生み出しながら臨めることに、感動すら覚える。おのぼりさんの自己満足ではあるが、自分の生き方・子供たちの育ち、そして親の生き様など、身の回りの「自分たち」を出発点に、「語る力」「伝える力」の修行中である。これもまた、自身の人間性の回復・ケア力の創造として、感情豊かに楽しみ苦しみたい。季節は秋なのだから。